第 3 回「奥会津の森を活かす」レポート

岩波友紀

３回目となるオープンディスカッション「奥会津の周り方」は、只見町でした。今回のテーマが「奥会津の森を活かす」であるように、私の中でも、奥会津の一番奥である只見町は山、森林、ブナのイメージがとても強いところでした。７割近くを森林が占める日本なので、このテーマは奥会津に限らず日本中どこでも関わってくるテーマだと思うし、森林がより多い地域がより過疎になっていると感じています。すでにあるこの膨大な森林というものを資源にできれば、世界が全く変わってしまうほどのものだと思い、今回のディスカッションを楽しみに聞きました。

昭和村地域おこし協力隊の押部さんは、木で作られた民具についてのお話でした。昔の民具はすぐそこにある山の木で全て賄われているということでした。今わりと持続可能な循環型の生活が注目を浴びながらも、なかなか一気には変わっていかない世の中だと感じています。このような民具ひとつのお話からも、地元のものを使って作り、それが仕事での道具になり、それを用いて生産をしていく様が、持続可能な生活の底辺にあるようだと感じました。
しかし、その技術や知恵が失われつつあることも伺い、それは想像に難くはありませんでした。やはり生産効率、経済性を主とするとそうなるのは目に見えてしまいます。このような技術も、伝統工芸のように守っていくしかないのかという思いと、生活のための技としては生き続けられないのかということも感じます。
お話の中で、お金がないから高価な良いものしか持ってない、というような趣旨の言葉があり、とても印象に残っています。お金がないからこそ、良いものを大事にずっと使っていくのだと。100 円ショップなどですぐにダメになるものをついついたくさん買ってしまうことを、ちょっと考え直さないとと思いました。

林業に携わる五十嵐さんは、その立場からの森の話をしてくれました。切っても売れない、儲からないから放置されて森が荒れていくというお話でした。管理されない森林がとても増えているという話は、昔から言われていました。実際に林業に関わっていらっしゃる方から木を一本倒すことの大変さをお聞きすると、やはり経済性で考えたらそれを続けることは難しいのだと実感できます。これでは、日本の森林全てを維持していくのは気が遠くなる話です。
会津産の木を使う話もありました。私は今、自宅を改装していて、床板や壁板に木材が必要です。その多くは値段などの関係から杉を使います。できれば私も地元産の木材があればぜひ使いたいとは思うのですが、個人がどうやって入手できるのかも調べてもなかなかわかりません。なのでネットで売っている品を買うことになるのですが、それが九州や四国、関西からの発送です。会津にこんなに木があるのに、なぜそんなに遠くから運んでもらわなければいけないのか…と、ちょっとおかしいと思いながらもそうするしかなかったのです。私

のように、地元の木材を使いたいのに、できていないという人は、他にもまだまだいるかもしれません。商売として成り立つのかはわかりませんが、欲しい人に届くようなシステムや、わかりやすい情報発信がないのだろうかと、伺いながら思いました。

只見町の中野さんは、植生や景観の観点から只見の森のお話をしてくれました。雪崩が山肌を削ってできる雪食地形という独特な景観のことを初めて知りました。森林の約４割が植林であると聞いたことがあり、実際どこでも山を見回すと、明らかに植林地帯だなという場所を見ないことがないくらいです。だからこそ、只見に残る自然のブナ林は貴重なんだろうし、残して引き継いでいくのは大事なのだろうと思いました。

ディスカッションを聞いて全体的に、今私たちの手元にあるものを見直すことの重要さを感じました。新しく何かを作ることが発展と思われがちですが、もともとただでいただいて今そこにあるものを使えばいいのだという意識の問題だと感じました。まさに森林のような、自然からいただいている財産です。経済性と合い入れないということが必ず言われますが、ただ意識を転換するだけのことです。それだけなのにどうして実際の生活に生かされないのか、ということを考えさせられるディスカッションでした。考えさせられるだけでなく、実践していかないと何も変わらないのだろうなということも感じたので、個人レベルでもやってみようと思います。この連続ディスカッションの中で、皆さんに連携が生まれていくことも期待しています。